

でなく、政治、経済、文化など国のあらゆる力を結集して遂行される総力戦について調査研究を行なった。一九四一（昭和一六）年七月から、メンバーがそれぞれの専門分野を活かした模擬内閣を組織して、閣僚や日本銀行総裁などの役割を担い、軍事、外交、経済、思想など各分野の機密情報を元に、日米開戦を想定した机上演習を実施した。その結論は「国力差が大きすぎ、日本は必ず負ける。戦争は回避すべし」。しかし、その報告は政府や軍部の政策に反映されず、日本は戦争へ突き進んでいく。

所長としてこの研究を推進したのが、飯村穰・陸軍中将だ。のちに南方軍総参謀長としてレイテ島決戦で指揮を執り、東京防衛軍司令官として終戦を迎えている。その孫で国際政治アナリストの

NHKが総力戦研究所を舞台としたドラマを作っていたことは、七月までまったく知らなかったのですが、実はNHK関係のプロダクションの方から戦後八十年を迎えるのを機にNHKスペシャルの番組として総力戦研究所についてのドキュメンタリーを作りたいと考えているという相談を受け、六月末から三度ほど、我が家で取材に応じました。丁度最後の取材が終わった頃、七月下旬に別の方から「ドキュメンタリーではない番組が流されるようだ」というお話を聞きました。急な話に驚

いて、NHKのホームページを開いてみると、このドラマの七月十六日付けの告知が出ていたのです。猪瀬直樹さんが書かれたノンフィクション『昭和16年夏の敗戦』が「原案」とされていて、近衛文麿や東條英機、木戸幸一内大臣、昭和天皇などが実名で登場します。ところが総力戦研究所の関係者は、すべて仮名でした。キャストिंगの紹介を読むと、祖父の飯村穰中将に当たる役柄は階級も変えられ、次のようになっています。

（板倉大道役 國村隼）
陸軍少将。総力戦研究所の所長。若きエリートたちの頭脳をアメリカとの戦況予測に使うべく研究を開始させる。だが、軍上層部の思惑とは異なる研究結果が出始めると、自由な議論の「最大の壁」となっていく。

飯村穰に関しては、本が何冊か出

『シミュレーション』昭和16年夏の敗戦』というドラマが、八月十六、十七日の二夜、前後編としてNHKで放送されました。日米開戦直前の一九四一（昭和一六）年八月、総理大臣の直轄機関「総力戦研究所」が様々なシミュレーションの末に「日本必敗」という結論を得て、近衛文麿首相や東條英機陸相に報告したものの採用されず、戦争に至った史実を元になっています。

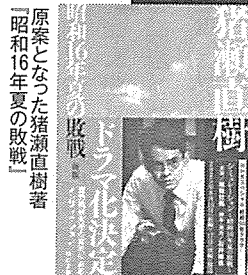
この総力戦研究所の初代所長を務め、日米戦争のシミュレーションを進めたのは、私の祖父で陸軍中将だった飯村穰（一八八八〜一九七六）です。ところがこのドラマで祖父は、シミュレーションに必要不可欠な自由闊達な議論を妨げ、結論を捻じ曲げようとする卑劣な人間として登場します。

私は放送前から、NHKと話し合いを重ねてきました。祖父の描かれ

方が事実と正反対であることに抗議し、戦争の記憶が薄れていく中で史実が歪曲されて広まってしまうことを恐れて、修正を求めたのです。

総力戦研究所は、一九四〇（昭和一五）年九月に発足し、翌年四月には陸海軍、各省、民間企業、銀行などから若手のエリート三十六名が研究生として選ばれた。平均年齢は三十三歳。軍事力だけ

「シミュレーション」で描かれた
総力戦研究所のメンバー（NHKホームページより）



総力戦研究所所長の
孫が怒りの告発

飯村 豊
国際政治アナリスト



終戦80年NHKスペシャルは 歴史の冒瀆だ

ています。総力戦研究所メンバーのOBの会があって、もう皆さん亡くなっていますけれども、ご存命時の手記や証言も残されています。それらのどこにも、「最大の壁」だったという趣旨の記述はありません。

猪瀬さんの本を原案にしたと言うのなら、NHKの制作陣も脚本・編集・演出の石井裕也氏も、細部まで読み込んだはずですよ。この本には、模擬内閣で大蔵大臣役を担当した今泉兼寛さん（当時、大蔵省主税局事務官）の〈演習中、模擬内閣の結論を押さえ込もうという素振りが飯村所長になかった〉という証言も引かれています。

模擬内閣の首相役に選ばれた若者を主人公に据え、頭迷で姑息な軍人の上司を敵役に配すれば、ストーリーは盛り上げやすいし視聴率も取りやすいと考えたのでしょうか。ありきたりすぎる発想です。

もいきません。

見終えた感想は、やはり「全然違う」。案じた以上に、祖父は姑息で卑劣な軍人として描かれていました。模擬内閣の首相役の若きエリートをこっそり呼びつけ、

「不都合な報告は上に上げられない。意味はわかるな。空気に逆らってもいいことはない」

と恫喝して自由な議論を妨げるだけでなく、所長に盾突いた模擬内閣の企画院次長役に赤紙を出して、他のメンバーへの見せしめとしたり、首相役の弟に赤紙を出して家族まで追い詰めたりする。しかし若者たちは圧力に負けず、志を貫きました——という主役と敵役のはっきりした、通り一遍の作劇ですが、祖父はそんな卑劣漢ではありません。現実の総力戦研究所は「飯村塾」と呼ばれるほど、若いメンバーたちから慕われていました。

これはきちんと話をしなければと考えてNHKに連絡を入れ、親族としては受け入れがたいと伝えました。すると七月二十五日、NHKスペシャルの制作担当の方二名とNHKエンタープライズの担当者が押っ取り刀で我が家へ来られ、交渉が始まりました。

全然違う

昭和天皇が登場し、近衛文麿や東條英機、軍務局長の武藤章まで実名なのに、なぜ総力戦研究所の関係者だけ仮名なのか。NHKは、こうしておけば、いくらでも作り話を盛り込めるだろうと考えたのでしょうか。「それはあなたたち、頭隠して尻隠さずですよ」

と申しました。総力戦研究所の初代所長と言えば歴史上、飯村穰しかいないからです。ですから、こう提

あげくの果てにドラマの中の所長は、机上演習の議論が開戦回避へ傾くと、

「面倒に巻き込まれるのは勘弁だぞ」

と部下に言い残し、責任を投げ出してしまふのです。名優の國村隼さんが嫌味たっぷりに演じたため、座っているだけで卑劣な人間に見えてくるほどでした。

祖父が総力戦研究所の創設や日米戦の机上演習で果たした役割やアメリカとの戦争に慎重だった姿勢などは、ドラマでは全く無視されていました。時勢を鑑みれば、祖父は命懸けだったはずですよ。祖父の支援があったからこそ、総力戦研究所のメンバーは勇気をもって内閣に「日本必敗」の報告をしたはずです。すべてが捻じ曲げられて見えます。「これは見過ごすことはできない」と、私はあらためて怒りを感じました。

案じました。

「総力戦研究所という実在の名前を使わずに、国策研究所とか架空の名称にしたら、あなたたちは自由になれるんじゃないですか」

しかし聞く耳はもってくれませんでした。史実の重みに乗っかってエンターテインメントを作りたいという考えは、譲れなかったのです。しかし、それが大きな間違いなのです。舞台装置だけを猪瀬さんの本から借り、猪瀬さんの名前も利用しようという狙いだったのではないのでしょうか。

私は「ピントのぼけた申し入れをしていたら申し訳ないので、脚本映像を事前に見せて欲しい」とも頼みました。「それは出来ない」という返答でしたから、ドラマの詳細な内容は放送を見て初めて知りました。不愉快になるとわかっていたので、見たくなかったのですが、そう

的中した未来予想

そもそも総力戦研究所は祖父たちの発案で作られ、各省や民間会社から推薦されたメンバーには、口頭試問が課されました。余談ですが、このとき考え出されたのが、現在も広く使われている「面接」という言葉です。

「日本必敗」の研究結果は、一九四一年八月二十七日と二十八日、首相官邸の大広間で居並ぶ閣僚と統帥部関係者を前に報告されました。

大きなポイントは、南方進出の目的だった石油確保に成功しても、それを輸送する船を次第に失っていくという見通しです。年間に百二十万トンの船舶を撃沈されるが、造船能力はその半分の六十万トンにとどまると試算したのです。

また、四一年当時は勢力範囲を広

げていた同盟国のドイツが、劣勢になって敗北すること。その後、アメリカとの接近によって、ソ連が中立条約を破って参戦してくること。本土全体が空襲によって多大な被害を受け、国内の経済と食糧事情が悪化する。それだけの時期や規模など、予測は具体的に多岐にわたりました。四一年八月開戦のシミュレーションの結果、互角に戦えるのは最初の二年のみ。四年後には国力が尽き、対ソ開戦の決断を迫られた模範内閣が総辞職するところで、机上演習は終わっています。現実の戦局は、真珠湾攻撃と原爆投下を除くすべてが、この通りに進みました。

東條陸相は研究所の設立に尽力し、机上演習を毎日のように見学に来て熱心にメモを取っていたそうです。東條陸相が何を考えていたのか分かりませんが、首相官邸の報告会で日本必敗の結論を聞かされた東條

陸相は、

「このたびの机上演習について、研究に関する諸君の努力は多とするが、これはあくまで演習と研究であって、実際の作戦とは全く異なることを銘記しておいてもらいたい」と述べ、日露戦争の勝利を引き合

いに出して「戦というものは、計画通りにいかない」と語ったそうです。

終戦後、GHQは「総力戦研究所は戦争準備のための共同謀議の企画立案をした機関ではないか」と疑いをかけ、極東国際軍事裁判のための調査の対象として取り上げられました。祖父はそのとき次のように証言したことを戦後刊行した『現代の防衛と政略』という回顧録に書いています。

「私が昭和十六年八月に主宰した兵棋演習に於て結局日本は敗れるとの結論が出たが、政府はこれを探択せず、大東亜戦争に突入して今日の

敗戦を招いた。幸いにもこの演習の記録はアナタ方の手に渡った。これを読めば私の述べたことは一目瞭然である。もしこの研究所が企画立案の機関であつたらおそらく政府の戦争突入を防止し得たであろう」と述べた。

（中略）その演習経過が余りにも大東亜戦争の推移と酷似していたために私は意外にもGHQより敬意を表せられ、戦犯などはもちろん問題にならなかったのである」

幻の机上演習

実は祖父は陸軍参謀本部で欧米課長を務めていた一九三四（昭和九）年にも、同じような机上演習を行なっています。総力戦研究所の机上演習には民間人も入っていました。こちらは陸軍の情報部門を中心に参謀本部内で極秘に進められました。

そのことを私があらためて認識したのは、ごく最近、昨年の夏です。祖父の書類を整理しているときに、表紙裏に「豊において保存せらるべし 昭和四十八年」と記された回顧録『現代の防衛と政略』を再読したのです。そこには、こう書かれています。

「私の欧米課長当時、わが国には、海軍軍縮問題に基因して、米国と戦うべしとの意見が、盛んに行なわれた。私は日米戦争を口にする人々が、米国と戦ったならば、どうなるかを真剣に考えているのかを疑い、（中略）図上戦術を行なった」

結果をまとめた報告書は、三部だけ作られたそうです。一部は参謀本部に保管し、一部は陸軍士官学校同期で一九三五（昭和一〇）年に作戦課長に着任した石原莞爾大佐に渡し、もう一部は手元に置いたのですが、終戦後アメリカ軍の手に渡らな

いように焼却したとのことです。私は残る二部を捜していますが、まだ見つけれません。

したがって演習結果の詳細はわからないのですが、祖父は回顧録にその目的を「要は王手のない敵との戦争がいかに困難であるかを知ってもらうため」と書いています。「王手のない」とは、日本はアメリカを戦争で屈服させるだけの決め手を持っていない、ということ。軍内で高まっていた日米戦争も辞さずという意見を鎮めるためにこの机上演習が行なわれたことは間違いないでしょう。

総力戦研究所での机上演習より七年前にも祖父は対米開戦の無謀さを悟っていたわけです。その認識は、軍の首脳部や政府にも共有されていたはず。軍部のすべてが戦争に向かつて突き進んでいたわけではないことを、歴史に留める必要があると思います。

NHKにお願いしたこと

話をドラマの放映前に行ったNHKとの交渉に戻しましょう。その際、NHKの皆さんに、「どういう根拠で、祖父の人物像を変えたんですか。一次史料はあるんですか」

と尋ねても、何の返事もありませんでした。ドラマはすべて彼らの空想の産物なのです。

私は二人の弁護士にも相談しながら、交渉を進めました。最初に、「史実と大いに違っているのに、内容を修正してください」

と申し入れたのですが、「もう出来上がってしまったているので、修正はできません」

とのお返事でした。京都の太秦でセットを組んで撮影したそうですが、もう壊してしまったので撮り直

しはできないというのです。

「では次善の策として、第一に、これはノンフィクションではなくフィクションだと明らかにしてほしい。番組の最初に『内容も人物像もフィクションです』と最低十五秒間はテロップを流して、視聴者の印象に残るようにしてほしい。」

第二に、番組のHPを修正してほしい。三番目に、私の言い分を番組で流してほしい」

と申し入れました。ドラマに続く十分ほどのドキュメンタリーパートは初めから作る予定だったようなので、その中に私の主張を入れてほしいという依頼です。さらに、

「冒頭のテロップで『ドキュメンタリーパートで史実を語ります』と告知してほしい。ドラマ部分が終わった途端に視聴者の方々がテレビを消さないように、ただちにドキュメンタリーパートに入してほしい」

と細かく注文をつけました。

小手先だったNHKの対応

このドラマについて私がNHKに申し立てたい抗議には、二つの主旨があります。第一は自らの祖父について、遺族として感じる名誉毀損です。第二は、歴史の伝え方の問題です。このドラマはNHKスペシャルの枠で放送されました。日本で最も権威あるドキュメンタリーとして、周知されている番組です。それがあのようなエンタメドラマを流し、史実を歪めていいのかわ。歴史を描くとき、越えてはならない一線があるのではないか。私は戦後八十年を迎えた、これからの日本にとって、この第二の主旨がとりわけ重要だと考えています。

NHKの方々との交渉は、四、五回に及びました。態度は真摯で、三

点の申し入れについてはそれなりに努力してくれ、番組に反映されました。その結果は皮肉なものでした。ご覧になった方は「いったいこのドラマは何なんだ。史実なのかフィクションなのか」と混乱されたのではないかと思います。

番組HPにおける役柄の紹介からは「最大の壁」という文章が削除され、番組冒頭に次のようなテロップが付け加えられました。

〈これは「昭和16年夏の敗戦」(猪瀬直樹著)を原案に創作を加えたドラマです。総力戦研究所の所長および関係者はフィクションとして描かれています。ドラマに続き番組後半に総力戦研究所の史実を伝えるドキュメンタリーがあります〉

HPには、こんな言い訳もついています。

〈当時、総力戦研究所の所長だった飯村穰陸軍中將は、ドラマの所長と

は異なる人物です。飯村所長は研究所の設立と運営に尽力し、アメリカと戦争した場合の先行きを予測する机上演習(シミュレーション)の実施を決め、メンバーに組織の壁を越えた自由闊達な議論を奨励しました。導き出された「日本必敗」の結論は、近衛文麿首相、東條英機陸相らに報告されましたが、それが国家戦略に反映されることはなく、日本は開戦へと踏み切る事になりました〉

こうした配慮はそれなりに評価しますが、ドラマそのものが変わらないうのは、小手先の対応と言うほかありません。

歴史をエンタメ化していいのか

やりとりの途中、担当者の方からチラッと「映画化を検討しています」という話が出て、そのとき初めてドラマが映画化される予定がある

ことを知りました。聞けば、新たに一から撮影するのではなく、今回のドラマの素材をベースにして、映画化する企画とのこと。私は「えっ、それはないだろう。このまま映画化すれば、とんでもない作品になってしまう」と考えました。

「映画を作る際は、私の伝えた内容が反映されるようにしてほしいし、そもそもいまの状況では映画化に反対です」

と申し上げました。

「飯村さんの言われたことを反映させるように、努力しますから」

という時点で、この話は止まっています。ですから私の今後の課題はNHKで放映されたラインでの映画化を断念していただくことです。映画はテレビドラマより後々に残るものだし、ドキュメンタリーパートも入らないでしょう。

BPO(放送倫理・番組向上機

構)に申し立てをする考えも、NHKに伝えました。祖父への人権侵害と、公共放送が歴史を歪曲する番組を作るのは間違っているという放送倫理上の問題の二本立てで、進めるつもりです。

戦争の当事者や関係者や私のような遺族がいなくなつてからこのようなドラマを作れば、NHKは誰からも批判されず、どのような検証も受けなかったかもしれない。でも、むしろそのほうが恐ろしい。

戦争や国の歴史を、どうやって語り伝えていくか。このことは、時が経つにつれて大きなテーマになっていきます。歴史を軽々しくエンタメ化していいはずがありません。その線引きはどこか。史実の歪曲をどうやって防げばいいのか。国民全体の意識を高め、議論する必要がある。戦後八十年のいま、私の小さなアクションが役立つなら幸いです。